

2008年

7月10日（木曜日） - 挑戦する集落 -

本日、65歳以上の高齢者人口が過半の多数となるいわゆる限界集落の活性化を目指し、「集落の過疎・高齢化を考える集い」を開催しました。市内の限界集落はじめ各地の自治区の役員、住民、関係者の各皆様、約110人が集まっていたき、また、全国の限界集落活性化の取り組みの音頭とりをしていただいている綾部市の渡辺部長様と酒井会長様（水源の里連絡協議会）のお話もいただきました。素晴らしいお話をありがとうございました。

ところで、本市には全231集落のうち限界集落が17集落あります。全国でも、例えば過疎指定を受けている約8百の市町村の全約6万の集落のうち高齢化率が過半となっている集落が何と約8千、全集落の12~13%に至っていると伺います。当市でも、このような限界集落に対する取り組みが足腰強く必要ですが、私は、今こそ「支えあいの力」の結集が必要だと感じています。これまでの過疎対策というのはどちらかというに必要な道、生活インフラなどの物理的な環境を整え住民生活また生業の維持確保を支えるというのが比較的主眼であったのかなとも思いますが、今後求められる取り組みは、もちろんそれらも大切ですが、同時に集落や地域内外の皆様との「様々な支えあい、助けあいや心の交流」そしてそのことによる「連帯と絆」を大きな柱に加えてくことが大切ではないか、集落の皆様への心の目線を未来志向の一層輝いたものにいただく上でも欠かせないのではないかと思います。そのことにより、単なる生活・生業の維持確保にとどまらず、活力と元気のある里づくり、むらづくりへと、展望が内から湧き滲んで来るのではないかと感じています。

そして、もう一つ大切なことは、丹後には海、山、豊穡の里、食材、あるいは古歴史など、現代社会が求める環境、健康、心、癒し、などにつながる価値高い地域資源が既に多様に与えられていること、そのことへの改めての「気づき」です。「もったいない運動」というものがありますけれども、「もったいない」は言葉を裏返して言えば「ありがたい」ということです。既に与えられてありがたい、そんな集落足下のもったいない宝や恵みにいかに気づき、いかに勿体あることとしていくか。そして他方で、このことは大変厳しい現状の中で口で言うのは簡単ですが並大抵のことではないだけに、困難を天恵へと見直してみせる渾身の底力、それを一緒になって求め支える行政も含めた内外の多くの仲間の思いと行動の熱さ、そしてトータルには、挑戦する集落の底に横たわる喜び、その地光りする力強さが真に試され問われるのではないかと思います。本日は、そんな思いを深く皆と共に、集落の活性化への持続的な道程へと渾身に挑戦する第一歩を踏み出した。